



持続と変容の実態の研究—対馬60年を事例として



# 対馬調査報告

## 天道山登山の記

橘川 俊忠（非文字資料研究センター 研究員）

### 天道山に登る

山道を登りながらこう考えた。山は変わらないものの象徴であるが、本当に山は変わらないのだろうか。火山であれば噴火や、そうでなくても地震・大雨などによる崩壊、石灰岩や岩石の採取あるいは伐採・植林という人為的営為などによって、山の姿は大きく変わることもある。しかし、山は一般的には変わらないもの、「悠久の自然」の代表であると信じられてきた。とくに、その山が信仰に関わる山であればなおさらである。だから、人間の一生という時間に比べればはるかに長い時間がかかるとしても、現実には確実に変わっていく山、そこに「悠久の自然」を見ようとするのは、あくまで人間の側の「変わらないもの」を求める願望の反映でしかないのではなかろうかと。

「持続と変容」をテーマとする今回の対馬調査では、まず「持続するもの」をはっきりさせ、その上で変容の諸相を明らかにしようと考えた。そこで、「持続するもの」＝変わらないものの象徴である山を調べてみることにし

た。とくに信仰の山に登ってみることにした。対馬の信仰の山はいくつもあるが、中でも天道信仰の霊地である天道山（別名竜良山）はその代表的な山である。そこなら変わらない山の姿があるだろうという思いで、3月20日登山にかかった。

朝8時、宿の車で登山口まで、山の中腹を回る林道を走った。途中天道大神を祀る神社に参拝し、その先にある登山口から入山し、宿の若主人の案内を得て登りにかかった。そこから北西に向いた上部一帯は「竜良山原生林」として今では自然保護地区になっており、鬱蒼たる原生林が続いていた。しかし、案内板によれば、その最も古い木は樹齢160年だという。原生林によくある倒れた巨木もない。どんな原始林も世代交代を繰り返すものである限り、巨木が残っていないことは、その樹林の原始性を、必ずしも否定するものではない。だが、その逆もありうる。

そんなことを観察しながらさらに登っていくと、登山道は浅藻に向かって南東に下る道との分岐に達し、暫時休憩後北東方向の頂上を目指して、少し勾配のきつくな

った登山道を登った。暫く登ると樹林は灌木帯に変わり、汗がじわっと滲み出てくるころ、露岩の頂上に到達した。

### 頂上にて

頂上は露岩となっているため眺望は抜群であった。北側は内山の谷筋を挟んで対馬最高峰矢立山を中心に幾重にも重なる対馬の山並み、南側は、直下に豆殿内院、浅藻の集落とそれに接続する港湾、そしてその向こうに広がる玄界灘、東西には天道山もその一部となっている緩やかに起伏する長い稜線、360度さえぎるもののない眺望が得ら



浅藻集落より天道山を望む

れた。そのすばらしい眺望を楽しみながら、ちょっと早めの昼食をとり、やおら観察に取り掛かった。

周囲の山々は、3月にもかかわらず緑に覆われていた。もともとタブやスタジイ、檜等の常緑樹が多いこともあるが、その樹相は、大部分杉・檜の人工林であることが見て取れた。とくに矢立山を中心にした一帯は、伐採されたばかりであるらしく、枯れ草色の斜面が頂上近くにまで広がり、その中を大きなジグザグを描いて林道が頂上付近にまで達していた。聞けば、そこはかつて焼畑が行われていた場所だという。山の形は太古から変わらないとしても、表面を覆う樹相は何回もの変遷を重ねてきたようである。

海岸線に目を転じると、湾を限る岬の突端部は、緑で覆われ、岩礁に白い波が砕けているが、湾内の海岸はどこもコンクリートの護岸が作られ、その一部には立派な港が築造されている。頂上からでは確実にとらえられないが、係留されている船はそれほど多くはない。出漁中かもしれないが港の立派さだけが目立つ。港の立派さが目立つのは、集落の規模との関係かもしれない。そう言えば、対馬の人家のある入江という入江は、ほとんど護岸が築造されており、自然海岸はそこには残っていないように。築造された護岸の内側に人工砂浜さえ作られている所すらあった。

## 下山

たしか平泉澄の著書では、天道山は双耳峰となっていたが、どこがそうなんだろうかと頂上付近を探索したが、どうもそれらしい地形は見当たらなかった。そんな疑問を抱きながら下山にかかった。前日の雨で滑りやすい山道を、慎重に下って一時間半ほどで元の登山口に到着した。まだ日暮れまでには時間があるので、山の反対側の浅藻に回って八丁郭に行ってみることにした。再び宿の車に乗車し、山裾を回り込み、豆酏の町を抜け、浅藻の集落を目指した。豆酏の町からは、天道山は前衛の山に隠れ、直接見ることはできない。

豆酏の多久津魂神社は、天道山を御神体としており、神社はその遥拝所と聞いていたが、見えないというのも不思議な感じがした。

## 浅藻にて

浅藻は、天道法師ゆかりの地とされ、かつては人家は無く、近代になって移住者によって形成された集落だという。そのためか、あまり古い家屋は見当たらず、人口

もそれほど多くはなさそうであった。浅藻から見る天道山は、谷の最奥にそびえ、左右均整の取れた秀麗な姿を見せていた。集落を抜けて、天道山の懐にある八丁郭の見学にでかけた。八丁郭の周辺は、公園風に整備されており、入口には立派な鳥居が建てられており、その傍らに黒御影石の石碑があり、そこに「八丁郭由来記」と「自叙伝」と題する文章が刻まれていた。その「自叙伝」は次のように書かれていた。

### 自叙伝 御嶽教対馬天道教会准教正山下雪

顧るに私の母は神の信仰心の篤い人であった私は年十二才にして母の信仰実践に心をひかれ自も神を敬う心の芽生を感じ得た爾来私は只管神信心に徹することになった昭和十五年三十才にして渡満し山下吉雄氏と結婚在満中靈感に依り様々な予言が適中し戦事下の日本官憲のおとがめを蒙る等の事も屢であった。昭和二十一年久田村瀬に引揚げ本曾御嶽教に入り更に八丁角天道大神霊地に鎮座まします天道法師の古跡が放置された俁一般人の入山が「タブー」とされて居った。昭和三十六年一月吾に夢ありて「汝われの前に麦種子を持ち来れ」と私は之将しく天道法師の神啓なりと自覚し神啓に従い来り天道法師聖霊を礼拝し茲に発心して八丁角天道大神霊地開闢を神業と心得て霊力を注いだのである。昭和五十五年十一月多年に亘る神業報いられ拝殿の建設神前公園の造成概ね整いたるに依り天道大神霊地顕彰の碑を建立し吾無き後の世と雖も観音の化身として現れ給う天道法師の信仰に徹し拝ろがみ奉りて尊い御神護を拝戴される人々の多からんことを祈る 敬白

(原文のまま)

たしかに、碑文の通り、八丁郭の周辺は整備されており、拝殿が建てられ、祭壇も設けられるなど、以前の様子とは相当変わっていると想像された。天道山の山容は変わっていないくても、信仰の在り様はけして以前とは同じではない。

持続しているかに見えるものの中に変容しているものを探り、変容しているもののなかに持続しているものを発見しようとする我々の研究は、やっと始めたばかりであるが、天道山の環境と信仰の在り様は、そうした考察を進める上で、貴重な素材を提供してくれている。予備調査の段階から本格調査へ進展させるに当たって、重要な課題に到達したことを自覚しながら、夕暮れ迫る中、浅藻をあとにした。